氏　　名	趙　金昌
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　10188　号
学位授与年月日	令和　4　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	格結合頻度に基づく対象移動動詞の研究

主　　査	筑波大学　教　授	博士（言語学）	矢澤　真人
副　　査	筑波大学　教　授	博士（言語学）	杉本　武
副　　査	筑波大学　准教授	博士（言語学）	橋本　修
副　　査	筑波大学　助　教	博士（言語学）	田川　拓海

論　文　の　要　旨

本論文は、現代日本語における対象移動動詞の格結合頻度を調査・分析することを通じて、日本語の移動動詞の再分類、移動に関わる自動詞と他動詞との共通点と相違点、移動動詞のＶテイル形やＶテイク形、Ｖテクル形などについて考察したものである。

本論文は、以下の９章によって構成される。

第１章 序章

第２章 先行研究と問題の所在

第３章 格結合頻度に基づく対象移動動詞の分類―ニ格、へ格、マデ格を中心に―

第４章 起点志向型動詞と着点指向型動詞の格結合頻度―ニ格、マデ格、へ格、カラ格を中心に―

第５章 Ｖテイル形の格結合頻度について

第６章 移動動詞における自動詞と他動詞

第７章 Ｖテイク形の結合頻度について―本動詞の結合頻度との比較を通して―

第８章 Ｖテクル形の結合頻度について―本動詞の結合頻度との比較を通して―

第９章　終章

第１章では、学術的背景とともに、移動を表す他動詞に関する格結合頻度を軸とした研究が必要であること、移動に関わる自動詞と他動詞の共通点と相違点を明らかにすること、移動動詞のＶテクル形やＶテイク形と本動詞との差を明らかにすることといった本論文のリサーチ・クエスチョンが示され、さらに本論文の構成と概要が示される。

第２章では、まず、先行研究を整理した上で、各論考で、格の認定についてゆれが生じていること、同じ動詞に対して異なる分類がなされていること、自動詞と他動詞の扱いに違いが見られることを指摘し、本論文では、コーパス調査による格結合頻度を元にした実証的データに基づき分析が行われることが示される。

第３章では、対象移動動詞におけるニ格、へ格、マデ格の格結合頻度の分析が行われる。これらの格は、着点格として同様に扱われ、これらを優先的に取る移動動詞も一括して「着点指向型動詞」とされていたが、対象移動動詞のニ格・へ格の結合頻度を元に分散図を描くと、ニ格とへ格との結合頻度の割合が 20:1 を越える

A グループと、へ格ともそこそこ結合する B グループ、ニ格・へ格ともに結合しにくい C グループの 3 つのクラスターが浮かび上がること、B グループも 5:1 程度の B1 グループと 3:1 程度の B2 グループに分けられること、へ格とマデ格とは格結合頻度の上で同様の傾向を示すことが指摘される。A グループと B1 グループは限界動詞、B2 グループは非限界動詞とされること、B グループは継続動詞と見なせることから、これらのクラスターが限界性や継続性と関連付けられることが示唆される。

第 4 章では、対象移動動詞における着点格と起点格の格結合頻度の分析が行われる。まず、カラ格とニ格の格結合頻度の分散図から、W～Z の 4 つのクラスターが見いだせることが指摘される。出現の位置は異なるが、所属動詞から X はほぼ先の A に、Y もほぼ B1 に、Z は C、W は B2 に対応することが示される。

第 5 章では、コーパスに現れる対象移動動詞の「テイル」形と、共起する格の結合頻度の調査によって、対象移動動詞の格パターンとアスペクト形式「テイル」の意味との関係が検討される。「テイル」形が動作進行を表すか結果残存を表すかによって、A～C の対象移動動詞の継続性と結果性を判定し、A グループでは、－着点性、－継続性、＋結果性、－起点性、B2 グループでは、＋着点性、＋継続性、－結果性、＋起点性という素性を想定できること、B1 では、「移す・落とす」のように、＋着点性、＋継続性、＋結果性、＋起点性と見なせるタイプと、「送る・運ぶ」のように B2 と同様に、＋着点性、＋継続性、－結果性、＋起点性と見なせるタイプがあることが示される。C グループでは、「離す・奪う」などは、－起点性、－継続性、＋結果性、＋起点性であるが、経路ヲ格を取る動詞は、＋継続性、－結果性、－着点性、＋起点性となるというように、格結合頻度からの素性分析が試みられる。

第 6 章では、格結合頻度から見た移動動詞の自他に関する考察が行われる。ニ格及びへ格との結合頻度を観察する限り、対応する自動詞と他動詞で大きな差がないものが多いこと、ただし、「転がる・転がす」、「落ちる・落とす」では他動詞より自動詞の着点性が高いこと、「下がる・下げる」は他動詞より自動詞の継続性が高いこと、「落ちる・落とす」、「おりる・おろす」では、他動詞より自動詞で起点指向性が高いこと、自動詞は他動詞より経路志向性が高いが、「飛ばす」「通す」は経路ヲ格を取りやすいことといった差が指摘される。

第 7 章では、対象の空間的移動を表す V テイク形に注目し、本動詞と V テイク形との格結合頻度の分析と検討が行われ、①本動詞に「テイク」がつくことで、専らニ格とのみ共起するようになる動詞が多いこと、②逆に、「テイク」によってへ格、あるいはマデ格と結びつきやすくなる傾向のある動詞も見られること、③「テイク」によって、ニ格、へ格、マデ格のいずれも取らなくなる動詞もあることの 3 点が指摘され、「テイク」が結果性、限界性、継続性、着点性、起点性のそれぞれに関与することが示される。

第 8 章では、対象の空間的移動を表す V テクル形に注目し、本動詞と V テクル形との格結合頻度の分析と検討が行われ、「テクル」がつくことで、カラ格の結合頻度が大幅に上がる動詞と、反対に結合頻度が大幅に下がる動詞の二種類に分かれることが指摘され、「テクル」の求心性によって着点志向型と経路志向型とされる動詞の一部が起点に注目するようになったためだとの解釈がなされる。ここから、V テイク形と V テクル形では、「テイク」が継続性、限界性、結果性、着点性、起点性といった素性に関与するのに対して、「テクル」は本動詞「クル」に由来する「求心性」のみが関わっているという違いがあることが明らかにされる。

第 9 章では、全体の概要を示した後、本論文の意義と今後の課題が示される。

審　査　の　要　旨

1　批評

これまで、日本語の移動動詞に関する研究は、自動詞を軸に進められてきた。一部、他動詞に言及するも

のはあっても、部分的ないし局所的で、対象の移動を表す他動詞全体の振る舞いを扱うものはなかった。本論文は、移動を表す他動詞の研究の嚆矢であり、まずはこの点を高く評価できる。特に、散布図という単純な手法により、それぞれの動詞の振る舞いを客観的に位置づけて、そこにクラスターを見いだしたことは卓見としか言いようがない。

本論文の記述は、格結合頻度はこうなっているという事実の提示と、その前の事実の分析結果との対照が繰り返されるところが少なくない。一見単調な記述に見えるが、本論文がコーパスを元に対象移動動詞の例を格ごとに詳細に調査・分析し、客観的にまとまりを観察するという地道な作業を経て行われたものであり、対象移動動詞の実態提示として評価してよい。

さらに、反対語が一面、類義語であるように、対立物は、共通性と対立性によって成り立つ。ただ、ともすると、共通性に頼って、移動表現は自他対立に関わりがないから、自動詞を観察すれば、他動詞にも応用できるだろうと考えたり、ニ格とヘ格はともに着点をマークするから、共起する動詞も着点指向型動詞としてまとめてよいだろうと考えたりしがちである。本論文は、こうした安易な対立論を否定して、対立物を丁寧に分析して行く。先に示した自動詞と他動詞の振る舞いの違いの他にも、着点格としてまとめられるニ格とヘ格の振る舞いについて、V テイル形と合わせて観察することで、ヘ格が継続性と結びつきやすいことを実証している。V テクル形と V テイク形については、アスペクト的表現での観察は多くあるが、本論文では、空間表現における非対称性を極めて明示的に示すことに成功している。さらに、着点格と起点格の結合頻度から動詞を見ると、クラスターの位置こそ違え、ほぼ同じ動詞がクラスターをなすことの発見など、今後の日本語の分析で注目される指摘が数多く含まれている。

ただ、本論文の考察は、さらに理論的に詰めることのできる余地を残している。いくつかの素性を用いた分析を行っているが、まだ現状の違いを示すための名付けに過ぎず、素性間の関係性を検討して、理論的推論を導くための段階には達していない。ただし、こうした理論的な素性分析が可能となるのは、実態の記述がなされることを前提としており、対象移動動詞研究の嚆矢たる本論文により、今後これらの分析が導かれると見なすのが適切であろう。本論文の価値を損ねるものではない。

2　最終試験

令和 4 年 1 月 21 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。